
日番谷隊長の女難 1

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日番谷隊長の女難1

【Nコード】

N4009D

【作者名】

切香

【あらすじ】

日番谷隊長が女にモテモテ・・・ではないような、ただ単に迷惑かけられてるだけなような、微妙な小説。ばあちゃんと、妙齡の美女(？)乱菊と、赤ん坊がでてきます。ほのぼの、ちょこつとギャグ。

第一話： 十番隊の任務

昨夜のうちに薄化粧した山々は、水墨画のように黒と白の世界と化している。

見る間に朝日が差し込み、雪がきらきらと一斉に輝いた。山のあちこちから、水蒸気がたなびいているのが見える。

「たーいちよ。お茶、入りましたよ」

障子を半開きにして、外の雪景色を眺めていた俺の目の前に、湯気の立つ湯呑みが差し出された。

頷いてそれを受け取ると、松本は障子の向こうに目をやり、歓声をあげた。

「絶景ですね、流魂街の景色も、なかなか捨てたまんじゃないですね。」

「なんか旅館に遊びに来たみたい」

「仕事だぞ、これは」

「知ってましたか、隊長？現世だときこういう時、殺人事件が起こるんですよ。」

サスペンス劇場！ 温泉殺人事件！とかいう」

「・・・知るか」

「だいじょうぶ、隊長が今晚温泉に浮かんで土佐衛門になっても、あたしが名推理で犯人を捕まえてみせますから」

「ここは現世でも温泉旅館でも、サスペンス劇場でもねーよ」

俺は松本との不毛な会話を切り上げるため、松本を押しのとけると障子を開け放ち、縁側へと出た。

障戸が開け放しになり、外とつながった縁側は裸足にひやりと冷たいが、心地いい。

縁側から見下ろすと同時に、崖下からの冷たい風が吹き上げ、俺の

前髪を揺らした。

ここは、崖の上に立てられた、寺院のような形状をしている。
この寺院までには、崖に掘り込まれた石階段を延々と上らなければ
ならない。

頂上のここからは、階段はまるで玩具のように小さく見えた。
遙か下には、延々と見える限り続く塀が張り巡らされている。

それはまるで地平線のように、近くで見ると真っ直ぐだが、遠くか
ら見るとかすかに円を描いているように見えた。

この門の内側が広大な「流魂街」、外側が現世とつながりを持つソ
ウル・ソサエティの外部だ。

そしてこの建物の50メートルくらい下に、関所が設けられていた。
巨大な門の外に、黒々と人々が群がり、列を作っているのがわかる。
関所の内側はそれとは裏腹に整然としたもので、隊舎に似た平屋作
りの建物が並んでいる。

ちらほらと、関所の人間だろうが、人影が見えた。

松本も縁側についてこようとしたが、廊下に足が触れただけで、

「おお寒！」

と部屋に体を引っ込めた。

「よく裸足でそんなトコ歩けますねー。子供は風の子ですもんね」

「うるせえ！俺は寒い方が得意なんだ」

俺がそう言って部屋の中の松本を振り返ったとき、締め切った廊下
へ続く引き戸の向こうで、声が聞こえた。

「失礼します、日番谷十番隊隊長、松本副隊長は中におられますで
しょうか？」

「入ってくれ」

俺が告げると、戸がスツとひき開けられる。

廊下で膝をついて座っていたのは、好々爺って表現が似合うような、白っぽい着物に山吹色の羽織を羽織った爺さんだった。

「本日は、このようなところまでご足労を頂き、ありがとうございました。」

この西関門を預かっております時元と申します」

そう言つて、丁寧にも廊下に三つ指をつき、頭を下げた。

「いえいえ。ここの所精霊廷に押し込められる一方だったんで、ありがた……」

「松本！……時元殿、概要は聞いてるが、何が起きてるか説明してくれ」

「は」

時元、と名乗った男は、一瞬意外そうな顔をしてから、部屋の中に入ってきた。

隊長の俺が敬称で呼んだから違和感があつたんだろう。

年寄りを呼び捨てにするのに抵抗があるのは、やっぱり婆さんに育てられたからだろうか。

時元は俺と並ぶと、下に広がる景観を見下ろした。

「日番谷隊長もご存知かと思いますが、ここはソウル・ソサエティに4箇所ある関門の一つ、西関門です。」

現世からの死者は必ず、4箇所のうちどれかの門をくぐり、それぞれ流魂街の各地域に順番に割り振られてゆきます」

「すつこい、列ねえ……」

いつの間にか隣に来ていた松本が、振り分けを待っている死者の列を見下ろした。

「そうですね。死者の数にもよりますが……大体平均で一ヶ月くらいは並びます」

「いつ……一ヶ月？」

松本が素っ頓狂な声をあげる。

「あたし、よくこんなところ並んだわア……ていうか隊長、西流

魂街でしたよね？」

「日番谷隊長、西流魂街のご出身なのですか？それなら、この門を通られてますな」

時元が、意外そうな声をあげて俺の顔を見た。

確かに、死神といえは精霊廷出身の貴族、ていうのが普通だからな。流魂街出身なんて少数派だ。

「ああ・・・でも、全然覚えてねえな」

「隊長、意外と頭悪いですか？」

「答えようがねえ質問すんな！お前こそ、覚えてんのかよ？」

「あたし、馬鹿ですから」

「お前も覚えてねえんじゃねえか」

「まあ、現世で死んでから関門をくぐり、流魂街に居つく頃までの期間は、あいまいになる場合が多いですよ。

おかしいことじゃありません」

俺たちのやり取りをとりなすように、やんわりと時元が割って入った。

「話がそれるからしゃべんな、松本。それで、2日前、何者かに襲撃されたと聞いたが」

は、と時元は頷いた。

「死者の列が攻撃されたのと、流魂街の外堀の一部分も破壊されました。

その時は、精霊廷の門番、児丹坊殿のご尽力で追い返せましたが、またいつ襲来するか読めない状態です」

「児丹坊は、ここの警備もやってるのか？・・・知らなかったな」

「はい。精霊廷とこの関門は何万キロと離れておりますが、

今お2人に使っていたのだと同じように、穿界門を使って行き来していただいています」

「なるほど。敵の外見は？」

「体長は約10メートル。人間のように二本足で立ちますが、全身

は長く茶色い毛で覆われています。

顔には・・・まるで仮面のようなものをつけ、衝撃波のようなものを口から吐きます」

「・・・それ、虚じゃないですか、どう考えても。通常はありえないですが・・・」

「死神の魂葬ミスなら一体程度、ありえなくはねえよ。

とりあえず、襲撃された場所を直接見たい。あと、児丹坊も呼んでくれ」

俺はそう言つと、玄関に戻り、草履を取って戻ってきた。

「隊長？なんで縁側で草履はくんですか？」

「気にすんな」

「すんごい、横着しようとしてません？」

「松本。お前は時元殿と後できてくれ。先に行ってる」

「ちよつと！」

話聞いてんですか！という松本の声は、風の音にかき消される。

俺が、縁側から一気に崖下に飛び降りたからだ。

死覇装が風にあおられ、バタバタと音を立てた。

視界に大きく関所の様子が迫ってくる。

下にいる奴らも、まさか上から俺みたいなのが降ってくるとは思ってないらしく、全く気付いていない。

霊圧がある敵向けの戦闘教育は、受けてない、か・・・

死神だったら、俺の霊圧にすぐに気付くはず。

まあ、ソウル・ソサエティに虚が入り込むことなんて極めて稀だから、必要ないんだろうが。

「見覚えねえな・・・」

俺は無意識のうちに呟いていた。

その時。俺を見つめる目線を感じ、俺は視線を関門の外にやる。そして、難なく視線の主を見つけた。

第二話： 関門の襲撃者

「児丹坊！お前、来てたのか」

そこに居たのは、10メートル近い巨体の男。精霊廷西門の守護職、児丹坊だ。

こいつの頭と、俺の全身が同じくらいのサイズ、というデタラメな体の持ち主。

「冬獅郎！」

俺は、奴が満面の笑みを浮かべて差し出した両手のひらの上に一旦飛び降り、すぐに肩に飛び移った。

「お前、2日前に、ここで虚と戦ったって聞いたぞ」

「ああ。誰か死神が呼ばれるって聞いたんだけど、まだ来ねえだろ。鼻持ちならねー奴と顔会わせんのはいやだけどな、来るまでは俺が見張るところと思ってな」

あー。

俺があいまいな返事をする、児丹坊はしばらく沈黙した。

「待て。死神って、おめえか？」

「遅えよ、気づけ」

「いやいや、おめえのこと言っただねえぞ？おめーは俺の親友だ。俺はてつきり、貴族出身とかのお高くとまった連中が来るんでねえかと・・・」

「いいって」

俺は手を振って、焦る児丹坊をさえぎった。

死神の評判が、必ずしも高くないことは良く知ってる。

実際、「鼻持ちならない」「お高くとまった」「貴族出身の」死神、と聞けば、すぐ顔が思い浮かぶくらいだ。

「そんなことよりお前、どこで虚と戦ったんだ？」

「ホラ、そこだ」

児丹坊が指差したほうを見下ろすと、100メートルほど遠くで、なるほど、崩れ落ちた外堀を修理している集団が見えた。

トン、と児丹坊の肩から降り、そちらへ向かう。

ズダーン、と派手な音を立てて児丹坊が後ろに続く。

俺たちが行くと、修理していた奴らは慌てて周りへ避け、膝を地面についた。

近くで見ると、外堀は恐ろしくでかかった。

児丹坊のさらに倍は背丈があるだろう。

その一角が、見事なまでに打ち壊され、流魂街の中が見えていた。広がるのは荒涼とした原野だった。

無理もねえ。流魂街の一番外側は、誰も生きて行けねえような環境だっけ聞いてた。

俺は崩れ落ちた門に手を当てる。そして、そこに残された霊圧を感じ取った。

大虚か。

確かに弱くはないが、隊長や副官クラスの死神が出張る必要はねえ。

松本を残らせるか。

そう思つて、壁から手を離れた時だった。

わああっ、と関門の方でざわめく声が起こった。

ついで、誰かが怒鳴るような声、それに言い返すような甲高い声も。「どうした？」

俺は児丹坊の肩に乗り、声がするほうを見やった。

「関門のトコだな。死者が何か揉め事起こしてるみたいだ。止めるか？」

「俺の仕事じゃねえけどな・・・」

「とか言つて、結局首突っ込むんだろうに」

そついいながら、一番先に首を突っ込むのはこいつなんだ。

言い返そうと思ったときには、もう児丹坊は俺を乗せたまま、そちらに駆け出していた。

「官憲の横暴だ！」

「そうだ、撤回しろ！」

「うるさい！これは決まりごとなんだ」

俺たちが駆けつけた時には、既に騒ぎは大きくなっていた。

しかし、ドシーン、というありえない足音に、皆が言い争いをやめてこちらを見る。

正確には、児丹坊と、俺を。

うわ・・・でつかいのと、ちっさいのが・・・

心の声は聞こえねえが、絶対そう思ってる。

俺は児丹坊の肩を無言で蹴り、死者達に言い返していた守衛のそばに飛び降りた。

「何事だ！！」

「ひい！いえ・・・」

「冬獅郎、なに切れてんだ？」

「・・・切れてねえ。で？何があつたんだ」

「そ、それが」

黒い手甲脚半に身を固めた守衛の男は、困り果てたように言うと、視線を下に落とした。

その時、何かが俺の袴の裾を引っ張った。

「・・・ん？」

俺が見下ろしたその場所にいたのは。

「んふー」

俺を見上げて笑う、赤ん坊だった。

目、あっちまった・・・！

自慢じゃねえが、赤ん坊なんて触ったこともねえ。

赤ん坊の相手するくらいなら、大虚の群れと戦ったほうがマシだ。

俺は、一歩引いた。

赤ん坊は、一歩分這って進む。

困った・・・！

そう思ったとき、

「隊長！」

その声を、ありがたいと思ったのは初めてかもしれない。

時元を引き連れて歩いてきた松本は、目の前の俺と赤ん坊を見比べ、
鳩が豆鉄砲食らったような顔をした。

「隊長の、子ですか・・・？」

「そんなわけあるか！」

「ですよ。隊長も子ですもんね」

松本は非礼な台詞を振りまきながら俺の前まで歩いてくると、ひょい、と赤ん坊を抱き上げた。

「かわいい女の子ね〜！いないいない、バア〜！」

母性など砂粒ほども持っていないと思ってたが、意外と子供好きのようだ。

俺には、どこをどうみたら女だと分かるのかさえ、サッパリだ。

俺は何とか気持ちを立て直し、守衛に向き直った。

「何事じゃ、これは？」

時元が守衛の男に向かって問いただすと、守衛の男は、困ったように後頭部を掻いた。

「いや、その赤ん坊は死者の一人なんですが・・・更木に振り分けが決まったんです」

「更木！」

松本が大声を出した。違う、その更木じゃねえ。

「更木ってのはエリアの名前だ。エリア番号は百。最も治安の悪い場所だ」

「こんな赤ん坊、生きていけるわけじゃないじゃないですか！」

そう言つて松本は俺と、守衛を見比べた。俺を見られても困る。
「はあ。ですが、死者を公平に、順番に振り分けるのは関所の不可
侵のルールなのです。」

治安の悪い地域に振り分けられる死者もいる以上、条件をつけてい
ては切りがありません」

「それが横暴だつて言つてんだ！」
死者の列から怒号が飛ぶ。

なるほど。

この赤ん坊が「更木」に振り分けられるのを見た死者たちが、もつ
と治安のいい場所へやるように守衛側に要請した、ということが。
その感覚は確かにまともだが、その一方で守衛の理屈も分かる。
ガキだから治安のいいエリアで、大人は悪くてもいい、と単純に割
り切ることもできねえし。

でも……

「……冬獅郎よ」

頭上から児丹坊の声が降つて来る。やつには珍しく、困つたような
声音だ。

俺は騒ぎの渦中にいるとは露知らず、にこにこ笑っている赤ん坊を
見た。

松本の腕の中にいたそいつは、俺の視線に気付くと、顔いっぱい
笑つて、手を差し伸べてきた。

「この子、隊長のこと好きみたいですな……」

俺はそいつに歩み寄る。勝手に、深いため息が出た。
そのまま手を伸ばして、赤ん坊を抱き取つた俺を見て、松本は目を
しばたかせた。

「こいつは、連れて行く。何とかしよう」

死者たちの中から、一斉に歓声があがった。

全く。自分の行き先を心配するので精一杯だろうに。

さっきちらりと見た、原野にしか見えないエリアを思い出してた。
あんなトコに、こんな赤ん坊一人放り出せねえしな。

「ひ、日番谷隊長・・・」

当惑して俺を見る時元の視線を感じて、俺は振り返った。

「すまん。でも、ちよっと思うところがあるんだ。俺に任せてくれ」

「連れて行け、冬獅郎。ここは俺と乱菊さんでどうにかすらあ」

「松本。相手は大虚だ。破面じゃねえから、それほど気張ることねえ。頼んでいいか」

「・・・了解ッス」

多分頭の中は疑問符でいっぱいなんだろうが。それでも松本は頷いた。

第三話： 遷

児丹坊がやってきた穿界門を通ると、そこは精霊廷西門の真ん前だった。

確かにこれなら、距離は離れてるにしても、精霊廷と西関門の両方を護れるだろう。

それに、騒動が起こることなんて、それぞれ何十年に一度あるかどうか、くらいだ。

振り返ると、背負った赤ん坊は俺の背中でスヤスヤと寝息を立てていた。

人の気もしらねーで・・・

どこかで、お前の親は、お前を失って、泣いてるんだろうに。

最近の現世では、親が子を殺すこともあるって噂で聞いたけど。

お前みたいに笑える奴は、きっと違うんだろ？

そう思っでは見たが、こんな幼さで命を絶たれたこのガキは、問答無用に哀れだった。

あまり隊首羽織姿でうろつくのも嫌だったから、瞬歩を使った。

見慣れた家の前で、俺はほっと息をつく。

粗末なその家は、俺が死神になる前、ばあちゃん、雛森の3人で暮らしていた場所だ。

この俺を育ててくれたような人だから、このガキ1人くらい、何とかしてくれるだろう。

「ばあちゃん、いるか？」

ガラリ、と扉を開けた瞬間。俺はその場に固まった。

灯りも差さない部屋の中で、布団に包まって、ばあちゃんは動かなかった。

囲炉裏にも全く火の気がない。

「ばあちゃん、大丈夫か？」

俺は慌てて膝立ちで布団の脇まで寄ると、ばあちゃんを覗き込んだ。
「ああ・・・冬獅郎。戻ったのかい」

その声も、体もガタガタと震えてた。その額に触れると、明らかに平熱じゃない。

「なんだか、寒くてねえ・・・」

「当たり前だ！この寒いのに火も入れねえで」

俺は囲炉裏を振り向くと、口元で「赤火砲」と小さく唱えた。

それと同時にぽつ、と囲炉裏に火が灯る。

本当はこんな日常生活で使えるはずも無い技だが、力を最小限にまでコントロールできれば、正直かなり便利だ。

公には禁止されていたが、俺はよく使っていた。

土間に積み上げてあった薪を囲炉裏に突っ込み、締め切られていた窓を開けて外の光を入れた。

そして氷輪丸で氷を出すと、それを刀で細かく砕いて、氷枕を作る。それをばあちゃんの額に置き、震えがおさまった所で、やっと俺は一息ついた。

その時。

「ふわぁ」

乳臭い息が首筋に当たり、俺は思わず肩をビクツと震わせた。完全に存在を忘れてた。

「その子・・・」

ばあちゃんの目が、赤ん坊に吸い寄せられる。

「拾ったんだ。西関門で」

背負ってきた紐を外し、あまりの体の柔らかさに若干ビビりつつ、畳の上に下ろす。

俺の気持ちなんて露知らず、赤ん坊は上機嫌で部屋を見回すと、早速這い回りだした。

「関門・・・？」

「ああ。治安の悪い地域に送られようとしてたんだ。連れてきた」
「・・・そうかい」

「自分がやつてもらったことは、ちゃんと返してやらなきゃな」
「ばあちゃんは布団の中から目を細めて赤ん坊を見てたが、俺がそういうと、俺の顔を見上げた。」

「ほんに、お前は良い子だねえ」

「・・・そんなんじゃないよ」

柄にもねえが、思わず赤面した。

良い子、なんて護廷十三隊の隊長に言う奴がほかにいるかよ。

「何か食わなきゃ治らねえぞ。米あるか？」

空っぽの鍋を台所から持つてきて、畳の上で鍋の上に氷輪丸をかざす。

こんな格好、とてもじゃねえが部下には見せられねえ。

少し霊圧をこめるだけで、鍋は氷で満たされた。

「便利な剣だねえ、冬獅郎・・・」

「本来こんな使い方しねえけどな」

それを囲炉裏の火にかけようとした、その時。

赤ん坊が、氷に手を伸ばそうとしてるのに俺は気付いた。

「冷たいぞ、離れてろ」

俺が引き離す前に、ぺとり、と指を氷につける。

その途端、ばしゃんと音がして、氷が瞬時に水に変わった。

「と・・・溶けた？」

俺は相当間拔けな顔をしていたに違いない。

赤ん坊が、俺の顔を見て腹が立つくらい笑ったから。

「オイ笑うな。お前、霊圧があるのか？」

そんなこと言っても、相手はしゃべれもしねえガキだ。

でも、鍋に手をつっ込んで、水を飲む姿に確信を持つ。

普通の死人は、何も口にする必要がねえ。飲み食いするのは、霊圧

がある奴だけだ。

「氷を、水にする能力、か・・・」

鍋で粥を作り、ばあちゃんと赤ん坊に食べさせてから、俺は首をひねった。

赤ん坊は俺の膝に凭れ掛かって寝てる。

「冬とか生活に便利でいいねえ」

布団の上に半身を起こしたばあちゃんがウンウンと頷く。俺は答えなかった。

初めこそびっくりしたが、考えてみると、この力何か役に立つのか？

俺と似てるが、霊圧は氷雪系とは明らかに違うようだ。あえていえば「水」系か。

精霊廷にも、こんなおかしな能力を持った奴はいなかったような気がする。

俺が考え込んでいると、ばあちゃんは赤ん坊の顔を覗き込んで、言った。

「名前、つけてあげなきゃねえ。しゃべれないんじゃ、名前も分からないだろうし」

「名前な・・・」

俺も赤ん坊の顔を覗き込んだ。

ヒトに名前をつけたことなんて一度もねえから、気がきたことを返せるはずもない。

「漣、はどうだい」

「みお？」

「水脈、ていう意味もあるし、お前が連れてきたんだ。どっちにも縁がある、この名前がいいよ」

水はとにかく、俺に縁がある名前か。俺は改めて、赤ん坊の顔を見下ろす。

氷雪系の力を持つ俺の子供分か？年は子供ほど離れてねえから妹分

か。

その名前を、ずっと、死ぬまで呼ばれ続けるのかと思うと、それはとてもなく重い気がした。

「・・・まあ、今すぐつけなくてもいいさ」

「いい名前だと思うけどねえ」

「なあ、ばあちゃん」

「なんだい」

「俺の名前って、本名か？俺は自分で、そう名乗ったのか？」

「・・・どうしたんだい、急に」

「覚えてねえんだ。あの関所ではあちゃんと会ったはずなのに。

それだけじゃなくて、その時の記憶が全然ねえんだ。この名前が本名なのかどうかも」

「不安になったのかい。それで」

俺は言葉に詰まった。

不安、と言われるとちよつと違うかもしれないが。

でもほかに当てはまる言葉も無い感情だった。

ばあちゃんはふう、と息をついた。

「安心しなさい。お前は、自分で名乗ったんだよ。

ひつがやとうしろ。漢字は自分で書けなくてね、ばあちゃんと桃であれこれ書いてみて、

あんたが領いた字にしたから、間違えてないはずだよ」

「・・・そうか」

この家に落ち着くまでの記憶を、俺はほとんど持っていない。

現世でどういう暮らししてたのか、なぜ死んだのか。

そして、どうやってこの家に来たのか。

物心ついたときにはもうこっちにいたから、人並みの記憶なんて持ちようがないのかもしれないねえ。

むしろこっちで生まれたって言ったほうが自然に思えるくらいだ。

でも・・・現世に、確かにどこかにいたんだらう親に、少しでも繋

がりがあるのは、悪い気はしなかった。

赤ん坊は無心に火を見つめている。

ばあちゃんも布団に戻ってうつらうつらしている。

朱色の火の光を見ながら、俺も眠気を感じ始めたとき・・・伝令神機が鳴った。

接受画面に出ているのは、松本の名前。

「俺だ」

「隊長っ！」

「何事だ？」

その声だけで、何かが起こったのは明白だった。

「大虚が、予想以上に力をあげていて・・・このままじゃ、関所にも被害が出ます！」

「わかった、今すぐ行く！」

松本は、戦闘業務ではそうそう助けを求めてこない。

事情は分からねえが、一刻も早く行ったほうがいいのは確かだった。立ち上がって、ふと赤ん坊を見下ろした。

このまま、弱ってるばあちゃんに世話を任せていくわけにもいかなえ。

俺は少しためらったが、赤ん坊を抱き上げ、紐を引っつかんだ。

「ばあちゃん、ちよっと出てくる」

「・・・冬獅郎」

「ん？」

戸を開けたときに呼ばれて振り返る。

「ごめんな」

「・・・何言っただ、いまさら。すぐ戻る！」

音を立てないように戸を閉め、俺はダン、と地を蹴った。

第四話： その小さな手を

「おいつ、松本と児丹坊はどこだ？」

俺は駆けつけざま、関所の入り口にいた時元の背中に声をかけた。

「おお、日番谷隊長。お待ちしておりました。お2人はあちらです！」

関内で焚かれた松明の光を浴びてなお、時元の顔は青ざめていた。

「何があつたんだ？」

「あの化物、見る間に死者の魂を奪い取り、力を高めたのです。

そこからとてつもなく強く……」

「分かった。ここを出るな！」

もう尋ねるまでもなかった。派手な霊圧が夜気を伝わってくる。

俺は時元にそっくり捨てる、と、

「え……あ。日番谷隊長！」

俺の背中に手を伸ばして何か言おうとした時元を振り切り、瞬歩でぐん、と速度を上げた。

しかし、やたら遠くで戦ってるのはどういうことだ？

瞬歩は確かに速いが、そもそも長距離走には向いてない。

闇の中でもはつきり輪郭が分かる、児丹坊の右肩に飛び乗った時には、かなり息があがっていた。

「お……おい、児丹坊、無事か？松本も」

「と……冬獅郎！」

「隊長！」

闇の中から声が返る。

それと同時に、闇の中に、ギリリと光るものが現れた。

それは大きさを一気に増し、辺りを真昼のように照らし出す。

児丹坊より数メートル先に、松本の姿が見えた……と思った途端、虚閃が松本がいたところを直撃した。

「松本！」

「大丈夫です」

児丹坊の左肩から、松本の声が聞こえた。
あつという間に視界は闇に消える。

一瞬照らし出されたその虚の15メートルはあるでかさに、俺は息を飲んだ。

そいつの霊圧がビリビリと肌に伝わってくる。

明らかに、昼間感じとった霊圧よりもあがつてる。

グルルル・・・

獣のような声が闇から響き、児丹坊は慌てて虚に向き直った。

「申し訳ありません。虚に、死者の魂を取り込ませてしまいました」

「・・・バカヤロー」

「すまねえ。俺、なんも知らねえで虚をぶん投げたら、死者の群れに突っ込ませちまって・・・」
それだ。

俺はそう思ったが、こいつに文句を言うのは後だ。

「乱暴だが、ぶった斬れば死者の魂は結局ソウル・ソサエティに行ける。俺がやる！」

そして、刀を鞘から抜こうと右手を肩にやって・・・俺の手は宙を切った。

「・・・へ」

振り返ると、ガキが俺の右手を握って、にこー、と笑った。
氷輪丸がねえ！

そういえば、鍋に水入れに井戸まで行くのが面倒臭くて、氷輪丸で代用したのを思い出した。

しかもガキを時元にでも預ければいいと思って、それも完全に忘れてた。

「た・・・隊長。サイテーです」

なんでこんな松本なんか言われなきゃなんねーんだ。
でも、否定できねえ。

「も・・・問題ねえ」

「問題じゃないでしょ!」

「いや待て。氷輪丸が無くても力は使える。ただ・・・問題がある」
「やっぱりあるんでねえか」

「力の制御ができねえ。松本、あいつをできるだけ遠くに吹っ飛ばしてくれ」

「もう・・・しょうがないわね!」

松本の斬魂刀の刀身が、さらりと砂のように闇に溶ける。

「唸れ・・・灰猫!」

砂状になった刀身が、一気に破面を襲った。

「ギヤアア!」

破面が獣の叫びを上げて、大きく後ろに飛びのいた。

俺は間髪要れず、鬼道を唱える。

「破道の三十、氷雨!」

本来は、せいぜい腕くらいの太さの氷の柱を生み出し、敵にぶつける技だ。

しかし、コントロールを失った俺の場合、ざっと半径数メートルにもなる。

そのうちの一本が、破面を貫いた・・・というより、頭から潰した。

「やった!」

児丹坊が声をあげる。地上に下りていた松本も、笑顔を浮かべようとして・・・固まった。

「ちよっと!あぶない、あぶない、止めてくださいー!」

「止めれるか!」

氷の柱のうちの一本が、松本の頭上に思い切り落ちてこようとしていた。

俺が、更なる惨事になることを半ば覚悟しつつ、氷雨でその氷柱を吹っ飛ばそうとした時……

ぴと、と俺の肩に、赤ん坊が手をついた。

「濡！」

俺が呼ぶと同時に……俺の放った氷が、瞬時に全て水になった。ただし、かなりの質量の水に。

「……ま、松本」

「水も滴るいい女……てとこですか？この真冬に！この水の量！」

改めて言うが、俺は松本に切れこそすれ、切られるような覚えは普段ない。

常に、100%、問題を起こすのはこの女であって、俺じゃない。

しかし、この赤ん坊が出てきてから、何か調子が狂ってるだけなんだ。

「言い訳無用！」

そして俺は、本当に久しぶりに……隊長と副隊長の関係になってからは初めて、松本に拳骨をくらった。

らんらんらん。

松本は、能天気になん歌を歌いながら、温泉に入っている。結局温泉じゃねえか。

ここで俺が死体になってあがったら、松本の仕業に違いねえ。

あの戦いの後、全身ずぶぬれになった松本を見かねて、昼に通された崖上の寺院に、一晚泊してもらったことになったのだ。

松本のワガママで、近くに湧いてる温泉の湯を汲んできてもらって、
やっとご機嫌というわけだ。

「隊長、一緒に入りましょうよー」

「断る」

「たーいちょー」

「断る」

「・・・これ以上ないがしろにしたら、素っ裸でダッシュしてそっ
ち行きますよ」

「いたたまねえから止める。何だよ？」

「聞きましたよー、児丹坊から。隊長のこと」

「・・・何の話だ」

俺はばあちゃんの様子を見るついでに執務室から持ってきた、処理
待の書類のひとつに目を通して言った。

とん、と捺印して、次をめくる。

俺の足元では、赤ん坊が座布団の上でスースー寝息を立ててる。

「50年前。隊長も、あの西関門で、ずっと振り分けを待ってて。

そして、やっぱり治安の悪い場所に一旦決まって。

その時に、隊長のおばあちゃんがそれを見つけて、頼み込んで隊長
を引き取ったんだって」

「・・・昔の話だ」

とん、とまた印鑑を押した。

「だからこの子を、放つとけなかったんですか？」

「死神なら、ソウル・ソサエティの理は護るべきだっていうんだろ
？」

俺は次の一枚に目を通して言う。

「・・・生憎俺は、そこまで人間できてねえ。分かっただろ、今日
の一件で！」

松本は、何も返事をしなかった。

ただ、ご機嫌な鼻歌の続きが聞こえてきただけ。

赤ん坊が、それを聞きつけてか、にこにこ笑い出す。

「おい、漣」

俺は印鑑を机において、見下ろした。そんなん聞いたら馬鹿がうつるだろ。

俺の心の声など露知らず、桜色に染まった頬でえくぼをつくり、もみじのような手を差し出してくる。

今度は俺のどの氷を溶かす気だか。

俺はその小さな手を握った。

f i n .

第四話： その小さな手を（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4009d/>

日番谷隊長の女難 1

2010年10月13日15時17分発行